two examples he then collected are now in his collection. Also in January, 1952, Captain (Surgeon) R. B. W. Smith, an ornithologist at Haneda Air-Base, has collected this species at the air-base field (not marshy place). The specimen, however, was taken by rat before being stuffed, and the sex is unclear. The above two localities, Tamatsukuri and Haneda (Tokyo), are new additions to the known records of the Preyer's Grass-Warbler.

It was added that prior to Seeborn's description of '*Megalurus pryeri*, n. sp.', the species was known to Blakiston and Pryer who made it a species of the Genus *Cisticola*, in their papers in Transactions of the Asiatic Society of Japan, viii, pt. 2 (1880) and x, pt. 1 (1882), about which the readers will find the quotations in the text.

ツバメチドリの記録

The records of *Glareola p. maldivarum* in Japan

蜂 須 賀 正 氏

Masauji Hachisuka

ツバメチドリは極めて珍しい日本産鳥類である。1951 年は 2 回のレコードがあるので此の機会に全部のものを整理する事が望ましい。他の種のレコードは大部分が標本又は採集品の写真によつて証明されてゐるのにかかはらずツバメチドリの場合は此の鳥のとび方に特徴があつて habitat が他のシギ、チドリ類と同様広々とした場所である關係上 sight record に authentic のものが幾つもある事は本種の研究上の大きな特点である。記録を年代順に記すると次のやうである。

- 1) 1889 年 9 月 28 日, 茨城県にて幼鳥 1 羽採集。
もと東大理動物学教室の標本で今は山階鳥研標本室に在る。
- 2) 神奈川県(相模)酒匂
初め松平頼孝氏のコレクション中に在つた。
- 3) 1927, 黒田長礼
京都の島津製作所標本部にて幼鳥 1 羽を購入。山城国採集。

4) 採集年月日不明 川口孫治郎

福岡県，山門郡両開村橋本開の浅瀬。「鳥獣報告集」v, no. 9, p. 56, 1930, 萩山「鳥」vii, p. 66, 1931. 4 羽観察された。

5) 1930, 5 月 19-21 日，萩山徳太郎

硫黄列島，北硫黄島石野村，1 公 (21 日)，1 母 (19 日)「鳥」vii, p. 66, 1931.

6) 1930 年 9 月 23 日，萩山徳太郎

東京都洲崎の埋立地で繁殖した 活鳥を飼育した。「鳥」vii, pp. 51-71, 1931. 写真及びスケッチより。

7) 1931, 7 月中旬一下旬，丹羽有得

大阪湾口（住吉の附近）大和川河口の水田の上空を 20 数羽が飛びながら虫を食べてゐたのを見た。

下村兼史，「北の鳥南の鳥」p. 228, 昭和 11 年 (1936)

8) 1936, (出版) 9 月初旬，下村兼史

長崎県有明の海岸（川口氏観察場所の附近）「北の鳥南の鳥」pp. 286-289, 昭和 11 年 (1936) 1 羽観察された詳しい記事及び写真あり。

この鳥を identify するには最も要領を得た記述である。飛行の有様は以下にのべる小林君の観察と略々同様である。

9) 1937, 7 月 22 日，榎本佳樹

大阪湾，淀河口，1 公，1 juv. を見た（小林桂助君談話）。

以上のレコードは余りに簡単であり榎本氏はすでに故人であるから之以上調べる事が出来ないのは残念である。ツバメチドリは 成鳥と幼鳥との色彩が体下部に於てはつきりと異なるものである。而して此の鳥の野外観察に経験の乏しい者が警戒心が強くて近寄り難い鳥の幼鳥，成鳥を見分けるのは先づ難かしい事である。次に記する平野好三郎氏の場合は同氏が 20 年の狩猟の経験があるにかかはらず ツバメチドリ を発見されたときは附近にムナグロが来てゐたので手に入れる迄はそれとばかり思つてゐた位である。（平野氏 1951 年 8 月 28 日手紙による）。

ツバメチドリは ムナグロに比べると色彩は別としても大きさ，体形，飛び方等非常に違いがある。それでも平野氏の場合 ムナグロに思い込む事はむしろ当然と言はねばならない。榎本氏は満洲から 2, 3 の sight record を新発表してゐるが数十年このかた誰も同一種類を採集してゐないものがある。

以上を総合してみると同氏のツバメチドリをみた記録は unauthentic とみなすべきである。

10) 1951, 5 月 3 日, 平野好三郎 (島根県庁狩猟係)

島根県, 出雲市川跡附近の斐伊川の左岸堤防より 30 間程沖合の砂浜, 「全鷗」16 卷 8 号, p. 25, 昭和 26 年 (1951) 及び手紙。

盛んに走つてゐた唯 1 羽を採集した。附近にはムナグロもゐたさうである。この日は大雨が降つており, その 2, 3 日以前には相当な大風が吹いてゐたさうである。

この個体は ♀ であつて伊達源一郎 (島根新聞社長, 本会々員) のコレクションに加へられて保存されてゐる。「全鷗」にはこの標本の色彩も記されてゐるがツバメチドリに間違いはない。

11) 1951, 7 月 22 日, 小林桂助

大阪湾港口, 大和川河口の埋立地で通称南港と呼ばれ戦時中は高射砲の陣地となつてゐた場所で 5 羽の群がとんでゐるのを目撃した。此の土地には 2, 3 尺の葦が生へてゐてセツカやヒバリが棲息しコチドリの巢も発見された事があるが, あちこちに水溜のある所にはヨシキリやカルガモが見られる。この地域の附近には広々とした干潟でシギ, チドリ類の絶好の棲息場である。それで広々とした此の附近全体からみるとツバメチドリの発見されたあたりはそれでも一番の乾燥地と言はねばならない。小林君は過去 2 年間この河口でシギ, チドリ類を観察された事は 80 回以上に上つてゐる。言ひかへると春と秋のシーズンには必ず日曜毎に野外観察に出られてゐたのである。同君は又シギ, チドリ類の北半球産の種及び亜種の殆んど全部のコレクションを所有しておられるのである。

同氏の観察によると 5 羽のツバメチドリの翼は長くて尖りとび方は余り早くなく, チドリ類とアジサシの中間であるが羽ばたきのゆつくりしてゐる事は一寸アジサシに似てゐる所がある。又じぐざぐにとぶ。色彩は胸の暗色のバンドと下腹部の白がはつきりとコントラストして見て尾の先端の暗褐色は黒つぽくみえたさうである。

以上の記録をまとめてみると硫黄島 1 回, 関東 3 回, 関西 3 回, 中国地方 1 回, 北九州で 2 回採集又は観察されてゐるから日本列島では関東と北九州の間では 10 回, 約 37 羽の鳥が 60 数年間に採集又は観察されてゐるのであるけれども鳥学の盛んになつた過去 20-30 年の間には 1 年に 2 地方でみら

れた事も 2 回あり、2 年続けて出現した年もあつたが 4 年位みられない事もある。採集又は観察された月は 5, 7, 9 月で 9 月が一番多いから秋の渡りの時大陸の鳥が経路を過り日本に達した事が分る。幼鳥が多いのもこの理由を物語つてゐる。

ツバメチドリはとび乍ら昆虫を食べる習性であるからツバメのやうに南に渡らなければならない。琉球から報告があり台湾には割合に普通である理由がうかがはれる。

無事に冬を越して成鳥となつたものはなかなか迷鳥にならないので初夏の頃ツバメと一緒に日本を訪れた例が少ないのも又当然と考へられる。然し夏鳥として渡つた場合条件が備はつてゐれば(洲崎の場合)繁殖が可能なのである。

この報告脱稿の後念の爲黒田長礼博士に覽て頂いたら次の 2 産地が洩れてゐると教へて頂いた。次の通りである。

「一つは伊豆八丈島でこれは Hand-L. 1932 ではなく 1942, p. 161 にあります。もう一つは福岡県筑紫郡臼佐村井尻で安部幸六氏「鳥」58 号 170 頁(1949)にあります。採集日は 19. ix. 1948. これと同一の鳥のことは江崎梯三氏の通信に「福岡附近」で採集とあります。「鳥」57 号 66 頁下より 2 行目を御覧下さい」。

そのほかにも色々教へて頂いたことがあるが取敢えず以上を追記する。

次 号 豫 告

本誌次号はその後蜂須賀博士追念号としてなるべく早く発行することにきまつた。追念篇、論文篇共 100 頁位、巻頭口繪 4~6 面を予定している。追念篇には黒田会頭、J. Delacour その他内外の方々十数氏が寄稿されるであろう。論文篇のほうは

黒田長久 On the skeletons of *Puffinus nativitatis*

宇田川龍男 The Avifauna of Teuri and Yagishiri Island, Hokkaido

羽田健三 1950 年以降信州に蒐集せる野鳥類 第一報

立花繁信 宮城県下のコシアカツバメ

高島春雄・山田致知 日本関係ペンギン資料

小林平一 タマシギの観察 (1)

その他を予定しているが一部変更は起り得ると思う。